

|    |                    |    |
|----|--------------------|----|
| 目次 | 学問と研究              | 1  |
|    | 2004年度「指定研究」研究組織一覧 | 2  |
|    | 2004年度「指定研究」研究目的紹介 | 3  |
|    | 2004年度「一般研究」選考結果発表 | 7  |
|    | 2004年度「一般研究」研究目的紹介 | 8  |
|    | 海外調査出張報告           | 12 |
| 叢報 | 17                 |    |

# 研究所報

No.44

2004. 4. 1.

## 学問と研究

大谷大学長 木村宣彰

いま日本の大学における教育・研究が問われている。本年から国立大学の独立法人化が施行され、大学改革の大波は国立大学のみにとどまらず、公立私立のあらゆる大学をも呑み込もうとしている。国立の大学と相対化される私立大学は、今こそ教育・研究の意義を真摯に考えなくてはならない。教育・研究が大学の使命であることは、いつ如何なる時代にあっても変わらないが、その中の研究のみに特化したのが大学が付置する研究所である。

本学の真宗総合研究所が他の研究所と異なる点は、その名称が示すように真宗による総合化という点にあるが、更に組織としては専任の研究員を置かないところにある。その理由の一つは研究組織が「共同体化」することを避けるためである。「共同体化」が進むと構成員は互いに選ばれた者の意識が強くなって相互不干渉になり、徐々に官僚化・権力化して安定志向へと向かうことになる。相互に干渉せず、批判がなくなるとどうなるか。情報の内部秘匿、総花主義が進み、悪平等となり、組織本来の目的達成が著しく損なわれるようになる。本研究所が専任を置かないのはこの弊を避けるためでもある。

本年4月に制定された「研究所規程」には新たな条項が加わっている。即ち「自ら不断に点検及び評価を行う」という条項である。研究組織の「共同体化」を避ける自浄努力の現れである。

ところで、研究の評価とは何か。人類が創り出した知、或いは学は、それ自体がいま問われている。誰にとっての知なのか、何のための学なのか。そのことの問いこそが学問であろう。かつて大学は「学問の府」と呼ばれたが、昨今は余り耳にしない。また、学問という言葉自体も多くは使われなくなった。学問を専らにするのが学者であるが、最近は研究者という言い方が多く用いられている。いずれも実務家ではなく、未知のことを詳しく調べ、深く考えて事実を明らかにすることを任とする人たちである。

ところが、学者といえば世間の動きに疎く、社会から隔絶して過ごしているという印象がある。そのことが屢々揶揄される。それに対して研究者は世間に役立つ仕事を行う人として考えられているようである。最近では大学の教育・研究にも社会に役立つ実利が要求される。それに呼応して産学連携の実学を強調する大学も多い。そのような大学に属する研究者は産業界との共同研究を目指している。産業界は研究者を望み、学者を求めない。

人文・社会・自然の諸科学を問わず未知の事柄を解明していく過程が研究である。未知のことを研ぎ究めることを「研究する」という。その研究には必ず「成果」が予想されている。これに対して学問というのは、自らが課題とする事柄について主体的に学び、かつ問うことである。しかも自分なりの方法で独自に解明して納得を得ること、或いは深い認識や見解に到達する営為が学問である。直接的な「成果」が要求されている研究とはやや異なる特性を有している。目に見える形の成果に結びつかない学問は「評価」の対象とはなりにくい。ここに世間から学問が疎んじられる一因がある。

また、学問には万人に共通する方法がないのであつかも共同研究のように共同の学問は成り立たない。自らの課題を独自の方法で解き明かすのが学問だとすれば、共通の課題について共同で学問を行うことは出来ないことになる。学問の方法は自らが開発することになる。よつて学問は評価されないのではなく、第三者の評価を許さないのである。学界における権威者の定説が研究を評価する基準となる。その定説や通説を「問う」ことが学問だとすれば、研究は評価できても学問は評価できない。

本学の研究所においては、本来の意味での「学問」を志向する非専任の研究員が不断に研鑽して優れた成果をあげることが期待されている。

## 2004(平成16)年度「指定研究」研究組織一覽

| 研究班                            | 研究課題および研究組織   |
|--------------------------------|---|
| 大学史研究<br>チーフ 安富 信哉             | 研究課題 大学史関係資料の収集・整理・公開<br>研究員 安富 信哉 (チーフ・教授・真宗学)<br>織田 顕祐 (助教授・仏教学)<br>加来 雄之 (助教授・真宗学)<br>東 館 紹見 (専任講師・日本史学)<br>水 島 見一 (専任講師・真宗学)<br>嘱託研究員 福 島 栄 寿 (真宗大谷派教学研究研究所研究員)<br>研究補助員 加 藤 基 樹 (博士後期課程満期退学)<br>日 野 圭 悟 (博士後期課程第3学年)<br>森 剛 史 (博士後期課程第2学年)   |
| 国際仏教研究<br>チーフ Robert F. Rhodes | 研究課題 諸外国における仏教研究の動向の把握と必要資料の収集・整理<br>研究員 Robert F. Rhodes (チーフ・教授・仏教学)<br>門 脇 健 (教授・宗教学)<br>木 場 明 志 (教授・国史学)<br>延 塚 知 道 (教授・真宗学)<br>木 越 康 (助教授・真宗学)<br>井 上 尚 実 (専任講師・真宗学)<br>田 村 晃 徳 (本学任期制講師)<br>嘱託研究員 羽 田 信 生 (毎田周一センター所長)<br>Jan Van Bragt (南山大学名誉教授)<br>Mark L. Blum (ニューヨーク州立大学助教授)<br>Paul Watt (デポー大学教授)<br>藤 枝 真 (本学非常勤講師)<br>小 川 直 人 (本学非常勤講師)<br>研究補助員 斉 藤 研 (博士後期課程第2学年)<br>小 澤 千 晶 (博士後期課程第2学年) |
| 西蔵文献研究<br>チーフ 小谷 信千代           | 研究課題 チベット語文献のデータベース化<br>研究員 小 谷 信千代 (チーフ・教授・仏教学)<br>白 館 戒 雲 (教授・仏教学)<br>福 田 洋 一 (教授・仏教学)<br>三 宅 伸一郎 (専任講師・チベット学)<br>嘱託研究員 ケツン (西蔵大学蔵学系講師)<br>Steven Hartwell (Multiscript Solutions International, Paris, France)<br>研究補助員 野 村 正次郎 (本学特別研究員)<br>都 真 雄 (博士後期課程第3学年)<br>井 内 真 帆 (博士後期課程第3学年)<br>羽 塚 高 照 (博士後期課程満期退学)  |
| 漢文文献研究<br>チーフ 藤嶽 明信            | 研究課題 浄土教関係文献の調査と研究<br>研究員 藤 嶽 明 信 (チーフ・教授・真宗学)<br>一 色 順 心 (教授・仏教学)<br>三 木 彰 円 (専任講師・真宗学)<br>采 翠 晃 (専任講師・仏教学)<br>嘱託研究員 梶 浦 晋 (京都大学人文科学研究所助手)<br>藤 谷 昌 紀 (本学任期制助手)<br>研究補助員 義 盛 幸 規 (博士後期課程第3学年)<br>三 木 朋 哉 (博士後期課程第1学年)  |
| 大谷大学DB研究<br>チーフ 草野 顕之          | 研究課題 大谷大学所蔵貴重資料のデジタル映像化<br>研究員 草 野 顕 之 (チーフ・教授・日本史学)<br>片 岡 裕 (教授・情報工学)<br>松 川 節 (助教授・人文情報学)<br>山 本 貴 子 (助教授・図書館情報学)<br>柴 田 みゆき (専任講師・コミュニケーション論)<br>山 正 治 (本学任期制講師)<br>兵 藤 一 夫 (所長・教授・仏教学)<br>浅 見 直一郎 (主事・助教授・東洋史学)<br>嘱託研究員 箕 浦 暁 雄 (本学非常勤講師)<br>研究補助員 有 松 志 保 (博士後期課程第3学年)<br>前 田 千 尋 (本学文学部卒)   |

## 2004(平成16)年度「指定研究」研究目的紹介

### 大学史研究

#### —大学史関係資料の 収集・整理・公開—

チーフ・教授 安富 信哉  
(真宗学)

本研究の目的は、本学における学問の指標となる大学の学事三百数十年の歩みを、前近代史と近代史の中に位置付けることにある。その実現のためには膨大な努力の積み重ねと相当の時間が必要なのは言うまでもないが、着実に積み重ねていかねばならない。こうした視点は、本学が『大谷大学百年史』や『清沢満之全集』の編纂事業を重ねるうちに明らかになってきたものである。この間の事情は『研究所報』43号巻頭の神戸教授の「大学史研究の必要性」に詳しいのでここでは省略するが、大学が自己の歴史を点検し、資料を収集・整理・公開することは、大学内部の課題に答えるばかりでなく、大学を支える時代社会に対する責任を公にするという面も存在するのである。

本年度から始まる3年間では、当面以下の具体的な点を研究課題としていく。

- ①近代以前の大学史(真宗学事史)関係資料の整理と公開
- ②近代以降の大学史(真宗学事史)関係資料の整理と公開

まず、①において本年度まず手がけなければならない点は、これまでの指定研究(真宗学事研究・大学史編纂研究)において収集され、『百年史』の刊行の基礎資料となったものを公開できるような状態に整理することである。②における本年度の当面する課題は、『清沢満之全集』編纂のために収集した資料を、公開できるような状態に整理することである。これらは、いずれも昨年度までの指定研究の事後整理といった課題であるが、これらの資料のほとんどは再入手不可のものであり、長期的な視野に立った整理の方針と保存の仕方も研究課題である。

こうした整理作業と並行して、近代以前の大学関係資料の調査・収集を始めていく。もともと、当初の「大学史編纂研究」では三百年史を視野に置き、近世に始まる

本学の長い歴史の全体を検証しようとしていた。その流れの中での当面の課題として近代百年のまとめが浮かび上がってきたのであった。したがって当面の課題を達成した今、いよいよ当初の課題に立ち返っていかねばならないし、その大きな視点によって初めて近代化百年の意味も明らかになってくるのである。また、今回の『百年史』には、十分に触れ得なかった点も多くあるので、こうした点をさらに補っていかねばならない。この点での課題も多いが、当面は、近代日本の大学制度における大谷大学の成立という点が看過できないので、佐々木月樵他を中心とした調査・研究を進めていく。以上のように、本研究班はこれまでの指定研究の成果を受けて、より大きな視野から本学の歴史を検証しようとすることに研究の目的がある。その大きな目的に向かって着実に歩みを進めていこうとするものである。

### 国際仏教研究

#### —諸外国における仏教研究の動向の 把握と必要資料の収集・整理—

チーフ・教授 R.F.ローズ  
(仏教学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握すると共に、真宗を中心とした浄土教思想を国際社会に紹介することを目的としている。この目的を達成するためこれまで本研究班では、海外仏教関係出版物の収集、国際学会の開催や学会への研究員派遣、近代真宗教学の主要論文や著作の英語への翻訳作業などを進めてきた。

今年度は、以上のような活動を継続して行いながら、さらに新しい研究機関や分野との対話交流を行っていききたい。活動内容は、下記の通りである。

- ①「近代真宗教学」代表論文の英訳出版研究
- ②キリスト教研究者(ドイツ・マールブルク大学神学部を中心として)との研究交流
- ③韓国東国大学校仏教研究者との共同研究の再開
- ④フランス高等学術研究所との共同研究

①「近代真宗教学」翻訳研究については、出版に向けた原稿整理をさらに進めるとともに、清沢満之・安田理

深の未翻訳論文の翻訳作業にも着手していきたい。②キリスト教研究者との研究交流は、マールブルク大学神学部との対話研究については2003年度までに『仏教とキリスト教の対話』として3冊の報告論文集を出版し、成果を公表済みである。今後は同大学との関係を保ちながら、新しい試みとしてキリスト教関係ドイツ語論文の翻訳研究を進めていきたい。また、2005年5月にマールブルクで行われるシンポジウム参加に向けた準備会も開いていくこととする。③韓国東国大学校との共同研究については、前回の浄土教思想比較研究の韓国側での成果を日本でも公表していくとともに、今後は日韓仏教における「信仰」の問題について、さらに対話交流を行っていきたい。④フランス高等学術研究所との交流については、今後の研究計画を確認する作業からはじめたい。

## 西藏文献研究

### —チベット語文献の データベース化—

チーフ・教授 小谷 信千代  
(仏教学)

本研究課題は、学内外のチベット語文献を調査・整理し、データベース化を進めることによって、チベット研究の基盤を構築し促進をはかることを目的としている。その目的を達成するために、本年度は、具体的に以下の課題に取り組む。

#### 1) チベット現地研究機関・研究者との共同研究体制の構築

チベットの文化・歴史・地理をあつかう上で、チベット現地における研究・調査の必要性はますます強まっている。こうした研究・調査を行う上で欠かせないのが、パートナーというべき現地の研究機関（西藏社会科学院や西藏大学）およびチベット人研究者の存在である。将来の共同研究の可能性を見据えて、まずは研究者同士の交流促進をはかるという意味で、本年度は、西藏大学蔵学系の講師であるケツン氏を嘱託研究員としてメンバーに迎え、1ヵ月程度の短期間で本学に招聘したい。氏は1986年7月に西藏大学蔵文系を卒業した後、西藏大学で教鞭をとり、特に因明学および宗義学の指導をしながら現在に至っている。卒業以

来一貫して教育に従事してきた氏の指導は、膨大な研究蓄積に裏づけされたものであり、それは、ラサ在住の多くの研究者たちの認めるところである。若手研究者中トップクラスにある氏を招聘し交流をはかることは、将来の共同研究の可能性を模索する上で極めて有意義なものとなろう。滞在期間中は短期間の間ではあるが集中的に、特定の文献を定めての読解研究を行いたい。また、チベット文化理解を、研究者はもちろん学生とも共有するために、公開講義を依頼したいと考えている。同時に、これまで研究員が個人的におこなってきた現地研究機関、たとえば西藏社会科学院との交流を、研究班ぐるみで行なえるよう、交渉を進める。

#### 2) 北京版チベット大蔵経コロフォン・データの構築

カンギュルの経部およびテンギュルの賛頌部および密教部の一部のデータ入力と公開をめざす。カンギュル全体のデータ構築はこれで終了する。訳経史やテキストの流伝を考える上で極めて重要な情報を提供することになるであろう本データの公開は、検索可能なローマ字転写データと、チベット文字によるPDF文書をWeb上で提供することによっておこなう。今後さらにデータが蓄積された場合を考え、著者、翻訳者、校訂者、地名等の固有名詞についてマークアップを行う必要があるが、本年度公開のデータ上ではそれは行わない。

#### 3) TLKのバージョン・アップ

TLK for Mac OS Xについては、すでにある試作品の細部の作り込みを行い年度内に正式リリースを行う。同時に従来、Web上でTLKのコードで公開していたデータを新しいTLK for Mac OS X用のUnicodeデータに変換して公開する。

#### 4) 図書館所蔵チベット語文献の整理サポート

TBRCリリースのCD-ROMデータ（チベット語文献PDF）を学内ネットワーク上で利用するための環境作りのサポートを行う。

#### 5) パーリ語文献研究の終了に伴い、当該研究班の資料の整理・保管を行う。

## 漢文文献研究

—浄土教関係文献の  
調査と研究—チーフ・教授 藤嶽 明信  
(真宗学)

本研究は、本学所蔵の稀観仏教漢文文献の中、浄土教関係の写本等の調査・研究を進め、その中の特に重要なものについては公開することも視野に入れつつ推進していく。本学には、その長い歴史を通して、仏教を中心として多くの文献が収集されてきた。その中で浄土教関係文献も大変多く、短期日に網羅的な調査・研究を完成させることはとうてい望み得ない。そこで、今年度は、親鸞の『教行信証』に中心を絞って所蔵文献を調査・整理・分析することから着手していく。具体的には、以下の諸点について調査・研究を進めていく予定である。

## ①本学作成目録の総合化

本学図書館は早くから蔵書の冊子目録化を成し遂げ、本学のみならず学外の研究者にとっても裨益する所大なるものがあつた。しかしながら、基本とすべき目録だけでも、第1目録・第2目録・第3目録と3種類に分かれており、それに加えて「香月院文庫目録」などの文庫目録もある。このため、研究者は目的の典籍を閲覧するために何冊もの目録を確認しなくてはならなかった。また、一覧性に欠けるため、その全体像を把握することも難しかった。目録は文献調査の基本資料であり、本研究推進のためにも、これらの各目録相互の記載を総合的に一覧できる一覧表が作成される必要がある。文献の一本がどのようなものであり各目録の何処に記載されているかといったことを示す一覧表を作成する必要があると考えられる。この一覧表の作成を『教行信証』に関するものから着手したい。

また、本学での特別展観などに際して作成された目録には、文献の解説などの貴重な情報が記載されている。一本の文献に関してこれらの情報が一覧できるよう、『教行信証』に関するものから作業を始めていく。

## ②学外作成目録の調査検討

本学所蔵の浄土教関係文献は、その重要性から、本学外で作成された『古写古本 真宗聖教現存目録』などの目録にも記載されている。これら目録の記載内容も調査・検討していく。これも『教行信証』に関する

ところから着手したい。

## ③研究論文などで言及されている本学所蔵文献の確定作業

本学所蔵の浄土教関係文献について、先行する研究論文などの中で言及されている例は決して少なくない。もつとも、それらの論文で言及されている文献が具体的に本学所蔵のいずれの典籍に該当しているのかは、必ずしも明示されていない。よって、先行論文が扱っている文献が本学所蔵のいずれに該当するのかを調査し、一覧表を作成したい。

また、これまでの先行研究の成果が一々の文献ごとに一覧できるようにしていきたい。これらのことを『教行信証』に関するところから始めたい。

以上のような作業を通して、今後の研究方針や方法をより確実なものとしていきたい。

また、本研究では、上記の研究に加えて、前身の「大蔵経学術用語研究」が担ってきた対外的な役割も、これまでの経過を踏まえながら、継続的に引き継いでいく。

## 大谷大学 DB 研究

—大谷大学所蔵貴重資料の  
デジタル映像化—チーフ・教授 草野 顕之  
(日本史学)

2001年10月、大谷大学近代化100周年の記念すべき年に、大谷大学は総合施設「響流館」を立ち上げ、広く世界に向けて新たな情報発信を始めた。いまや、これまでの大谷大学の貴重な学術的資産を、劇的に発展するデジタル化の世界に対応させて活用できるようなデータベースを構築することが、本学の使命となっている。しかしながら、これまで個々の研究班や個人によってさまざまな資料のデータベース化が試みられているものの、全学的な視野をもってデータベースを構築することはなされて来ていない。本研究班では、大谷大学におけるデータベース構築の全学的な視野からの検討とデータベース構築の具体的な実施、およびその公開方法についての検討を行なう。

課題となるさまざまなデータベース構築については各研究員が分担して行なう。また、全学的な取り組みが必

要と思われるので、本研究員、嘱託研究員はもちろん、さらには学内外の協力者を得て「大谷大学データベース構築に向けての研究会」を組織し、データベース構築についての課題を広く学内で共有するとともに、研究成果を発信していきたい。

本年度は、昨年度の成果をふまえ、学内の諸機関（とくに図書館・博物館）、研究所の諸研究班と協力体制を組みながらデータベース構築を推し進めていく。あわせて博物館に設置された端末や学内 LAN をもちいたデータベース公開も行なう。本年度内に行なう主なデータベース構築は以下のとおり。

- 1 大谷大学図書館所蔵『北京版チベット大蔵経』及びチベット語蔵外文献のデジタル画像データベース化
- 2 大谷大学所蔵貴重資料（歎異抄端坊本、禿庵文庫本選択集、教行信証坂東本順芸臨書本など）のデジタル画像データベース化とその公開
- 3 その他

また、他の指定研究の行なう研究データ等のデジタル化についても、一致協力して行なっていきたい。

## 2004(平成16)年度「一般研究」選考結果発表

## (A) 共同研究

| 研究代表者 | 研究課題および研究組織  | 補助金   |
|-------|--|-------|
| 桂華 淳祥 | 研究課題 石刻史料から見た近世中国仏教の社会史の変遷に関する基礎研究<br>研究員 桂華 淳祥(助教授)<br>松川 節(助教授)<br>協同研究員 西尾 賢隆(花園大学教授)<br>松浦 典弘(大手前大学助教授)<br>藤原 崇人(本学非常勤講師)<br>井黒 忍(本学任期制助手) | 200万円 |
| 友田 孝興 | 研究課題 レッシングの戯曲と宗教的啓蒙精神の研究<br>研究員 友田 孝興(教授)<br>吉田 孝夫(専任講師)<br>芦津かおり(専任講師)  | 200万円 |
| 佐々木令信 | 研究課題 平安時代古記録の研究<br>研究員 佐々木令信(教授)<br>東館 紹見(専任講師)<br>協同研究員 頼富 本宏(種智院大学長・教授)<br>赤尾 栄慶(京都国立博物館文化資料課保存修理指導室長)<br>杉本 理(本学非常勤講師)<br>堅田 理(本学非常勤講師)     | 200万円 |

## (B) 個人研究

| 研究代表者 | 研究課題および研究組織                                     | 補助金   |
|-------|---|-------|
| 門脇 健  | 研究課題 「悲劇論」との関連におけるヘーゲルの「反省論」の研究<br>研究員 門脇 健(教授) | 100万円 |
| 佐藤 義寛 | 研究課題 『列仙全傳』の研究<br>研究員 佐藤 義寛(教授)                 | 100万円 |

## 2004(平成16)年度「一般研究」研究目的紹介

### 共同研究

### 石刻史料から見た近世中国仏教の 社会史の変遷に関する基礎研究

研究代表者・助教授 桂華 淳祥  
(東洋史学)

中国の近世、とりわけ宋・元代における仏教と社会との関わりや歴史の変遷について、中国史の視点に加え、遼・金・元といった異民族支配体制や朝鮮半島および日本との交渉など周辺の諸民族或いは地域との関係という視点から、石刻史料の蒐集と整理を中心として問題分析を行い、当該研究課題の基礎的研究に資することを目的とする。

表題に示したように本研究で集中的に扱おうとするのは石刻史料である。従来、中国仏教史の研究には主として編纂史料が利用されてきた。もちろんそれに対置される「生の資料」たる石刻史料に関しても、20世紀前半には諸研究者によって現地調査や将来された拓本の検討もなされてきたが、その成果が従来の仏教史研究に十分に反映されるには至っていなかった。しかし近年、中国の経済発展とともに研究環境が改善され、多くの石刻史料が相次いで出版されて入手が容易になり、また現地へ赴き関係の碑刻を直接検証できる機会を得ることも可能となった。このような状況のもと、研究代表者は、現地調査での知見をもとに、石刻史料を用いて社会の底辺の動向を跡付け、当該時代の仏教史研究における新たな視点、すなわち「宋・金代に地域社会における寺院間のネットワークが発達したこと」(「宋金代山西の寺院」『大谷大学研究年報』第52集)を提唱し、「それが続く元代にも継続していて、連繋する地域を拡大させている傾向があること」(「山西からみた元代の仏教 一寺院の連繋と法会と一」『大谷大学史学論究』第9号)も提示した。本研究は、このような視点をさらに展開させるため、華北各地に残る原碑をはじめ、世界各地の図書館に収蔵される拓本なども視野に入れつつ、「生の資料」として現存する石刻史料をできる限り蒐集して分析し、今までにない史料集を作成し、そのデジタル化・データベース化を目指している。これによって、従来の研究では史

料が乏しいことから、空白の時代として扱われてきた当該時期仏教界の軌跡を跡付けるとともに、華北に限らず中国全域、さらには東アジアにおける仏教のネットワークの存在を明らかにするという新たな成果が期待できる。

なお本研究は、2003(平成15)年度、本研究「一般研究(共同研究)」の採択を受け、その研究計画に従って進行中である。しかしその間にも新たな石刻史料集が相次いで出版されて、その検討も必要となっている。またSARSの流行で当初予定していた現地調査の実施には至っていない。本年度はこれらの事柄も含めて活動を継続し、中国河北・山西地域に関する石刻史料についての基礎史料を作成する予定である。

### 共同研究

### レッシングの戯曲と 宗教的啓蒙精神の研究

研究代表者・教授 友田 孝興  
(ドイツ文学)

本研究は、前年度の継続として、18世紀ドイツ啓蒙主義文学の代表的存在であるレッシング(Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781)の世界を、その宗教的啓蒙精神の観点から考察するものである。その集大成的表現である『賢者ナータン』(1779/83年)においては、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒の三者が、ユダヤの賢者ナータンによって、特に彼が物語る有名な「三つの指輪」の寓話を通じて、相互の融和へと、つまり偏狭な独善性に起因する宗教的対立を超えて、共に人間であることの原初の共通地平へと導かれていく。宗教批判が力を増す18世紀にあつては、このような主張をもつ作品は極めて独自の意味を担っていた。本研究はこの『賢者ナータン』を中核に据えつつ、彼が執筆したその他の多様な著作、特に宗教・哲学・人間教育論や文学・演劇・美学論等を参照することによって、レッシングが追及した自由な人間性に立脚する宗教的啓蒙精神の本質を、総合的に把握するべく努めるものである。

これまでのレッシング研究には、宗教・文学・哲学・

演劇等の総合が欠如していたことは事実であり、それは18世紀という時代における知識人の活発な相互交流を見るにつけ、実に憂慮すべき欠損であった。その改善を試みることによって、より正確なレッシング像を把握することが本研究の目的である。この第2年度では、第1年度において果たされた基礎的作業に基づきつつ、より具体的には以下の問題に従事する。①近代ドイツないし近代ヨーロッパという広い精神的・文化的・社会的風土のなかにレッシングを位置づけること、そして、②そこから、現代に生きる我々の糧ともなるべき、宗教性についての深い思索を抽出すること、③さらには古典古代や近世の伝統との影響関係を明らかにすることである。

個々人の分担としては、『賢者ナータン』を全員の研究の中心に据えつつ、友田は、12世紀のエルサレムにおけるイスラム軍と十字軍の関係史、ならびにその町を支配したサラディン（戯曲の中の主要な登場人物の一人でもある）の人間像を考察し、その歴史的背景に立って、この戯曲をレッシングの『人類の教育 Die Erziehung des Menschengeschlechts』ならびに数々の神学論文、そして近世17世紀の思想家スピノザにおける独特なる神論との関連性から、さらにはドイツ観念論哲学の人間論・国家論・平和論等の相関性から考察する。吉田は、レッシングの寓意詩に見られる表現特性を、寓意詩のもう一つの盛期であった近世の伝統との関連から明らかにする。レッシングは、近世のイギリスやドイツ、さらにはその根底にある古典古代の寓意詩から大きな影響を受けており、そして寓意詩の本質をめぐる議論においては、18世紀のもう一人の偉大なる思想家ヘルダーとのあいだに、非常に興味深い見解の相違を見せている。言語芸術としての『賢者ナータン』の理解に、寓意詩というジャンルからの洞察を生かすことが目標である。そして芦津の主要な作業は、英国作家 William Taylor による『エミリア・ガロッティ』翻案劇 *Harold and Tosti* (執筆年代不明) が、シェイクスピア悲劇 *Titus Andronicus* と奇妙な相似を示していることに着目し、二作品のあいだの影響関係を明らかにしていくことである。

なお、この研究成果の一つの形として『レッシング戯曲集』の刊行も計画している。

## 共同研究

# 平安時代古記録の研究

研究代表者・教授 佐々木 令信  
(日本仏教史学)

本研究は、本学に所蔵され、国の重要文化財に指定されている、平安時代中期の貴族藤原資房(1007~57)の日記『春記』(長久2(1041)年2月条)の研究を通じて、本史料の特徴・性格を明確にし、また当該期の政治、社会、文化、宗教の全般について究明することを目的とする。

本学所蔵の『春記』が記された長久2年2月は、後朱雀天皇の治世で、藤原道長の長子で天皇の伯父にあたる藤原頼通が関白左大臣として政権を担当していた時期である。

この時期は、他に現存する古記録(貴族の日記)が少なく、早くから本史料の重要性が注目されてきた。内容的にも、北野行幸、季御読経などの大きな行事のほか、藤原公任の薨去、舟遊、仏師定朝に舟の龍頭を造らせたことなど、当該期の貴族社会を中心とする社会の動静が詳細に知られる、甚だ貴重な史料といえる。

また、本学所蔵本と同系統の写本として、現在、宮内庁書陵部所蔵本、京都国立博物館所蔵本が知られているが、本学所蔵のものを含むこれら3本の紙背には、真言密教の典籍である『大日経秘要抄』や祈禱文書などが書かれており、もとはいずれも京都の東寺(教王護国寺)の子院に所蔵されていたものであることが知られている。故に、本学所蔵本を中心に、2種の写本をも比較検討することで、これらの書写・伝来に関する種々の事実関係の解明が可能になると考えられる。

こうした諸点に注目しつつ、本学所蔵本を含む3種の写本について調査を行なう他、定期的に研究員・嘱託研究員による研究会を開催してゆきたい。大まかな分担としては、書誌学的考察を赤尾が、古記録と寺院、『大日経秘要抄』については頼富が、当該期の社会状況の検討については杉本が、仏教記事の内容検討については佐々木・東館が、内容の他の史書との比較検討については堅田が、それぞれ分担して行なう。これによって、それぞれの専門分野の知識と成果とを集約し、本学所蔵の『春

記』の内容・性格を総合的に究明することが可能となるものと考えられる。

## 個人研究

### 「悲劇論」との関連における ヘーゲルの「反省論」の研究

研究代表者・教授 門脇 健  
(宗教学)

本研究では、ドイツの哲学者 G.W.F.ヘーゲル (1770—1831) の名著 *Wissenschaft der Logik* (『大論理学』) の第2巻「本質論」の中の「反省論」の意義を明らかにすることを直接の目的とする。この「反省論」で展開される反省の三つの形態(「措定的反省」「外的反省」「決定的反省」)の展開は、現実との和解を目指すヘーゲルの哲学の中核をなすものである。

したがって、この三つの反省形態の展開の構造を解明することは、ヘーゲルの思考全体の解明に直結している。

本研究においては、これまでの論理学研究を踏まえてその論理構造を明確に叙述することはもちろんであるが、それに加えて、筆者がこれまで研究してきた *Phänomenologie des Geistes* (『精神現象学』) を中心としたヘーゲルの「悲劇論」(ヘーゲルの独自の『ハムレット』理解)における和解の構造と対比させることによって、この反省の論理が、「現実との和解」というヘーゲルの根本命題の核心を形成していることを明確にできるはずである。

しかし、18—19世紀のキリスト教・啓蒙思想そして文芸思想を背景にしたヘーゲルの叙述は、現代のわれわれにとっては必ずしも透明なものとは言えない。したがって、現代的視点として、ヘーゲルの本質理解(Wesen—無時間的過去の存在)と、フロイトの「子ども時代は、それ自体としてはもはや存在しない」つまり人間の存在は根拠すなわち本質が失われているということが存在している(トラウマ)という理解の対比を導入し、ヘーゲルの論理に新たな光を当てるといったのが、第二の目的である。

この第二の目的は、フロイトのエディプス・コンプレックス論などの参照はもちろんのこと、「フロイトへの

回帰」を主張すると同時にヘーゲルの『精神現象学』の影響を受けていたフランスの精神科医ジャック・ラカンの「鏡像段階論」なども参照することによってより明確な形で達成されるはずである。

そして、ここで明らかになった「和解の構造」をドイツ語でも叙述することによって、ドイツ語圏の研究者の批判を仰ぎたい。

## 個人研究

### 『列仙全傳』の研究

研究代表者・教授 佐藤 義寛  
(中国文学)

中国明代に汪雲鵬の手によって刊行された『列仙全傳』は、実際の利用頻度に反して、これまでほとんど研究がなされてきていない。そこで研究の第一歩として行うべきことは、当該書物の書誌学的研究である。その書誌学的研究に関しては、既に大谷大学文芸学会発行の『文藝論叢』第59号(2002年)・第60号(2003年)誌上に「『列仙全傳』研究(一)」として発表してきている。その論稿中では『列仙全傳』は先行する『廣列仙傳』を増補して作り上げられたものであることを明らかにできた。その研究を踏まえ、本年度の研究ではより具体的に『廣列仙傳』にいかなる改変が加えられて『列仙全傳』へと結実していったか、あるいはまた、その他の先行する仙伝類(『列仙傳』『神仙傳』『歴世眞仙體道通鑑』等)の影響がいかに影を落としているかを明らかにしていきたい。その際に収録されている500余名の伝記全てを対象として精読するのは、時間的に考えても無理がある。そこで『列仙全傳』の特徴の一つである絵像が附されている100余名をとりあえず第一次の対象とした。

また、本書は後世上梓されるいくつかの仙伝類(『仙佛奇踪』『三才圖會』等)の粉本ともなっている。その際には伝記本文自体が利用されるばかりでなく、それに附された絵像もまた粉本とされている。そこでそれらの図像分析(本伝との関係や各絵像相互の関連など)を第二の研究目的とする。

以上、二つの点を研究目的とするが、具体的な作業としては、個々の仙人の伝記を精読し、注解を加えていき

たい。そのためには対象となる仙人個々の先行する伝記資料にいかなるものがあるかも明らかにしていかなければならない。将来的には個々の仙人の総合索引となるべきものを編したいとも思っているが、本年度はその基礎となる文献資料の探索を行う。『列仙全傳』本文に関しても、その重要語句・事項に関して整理・分析し、それらをデータベース化する必要もある。そのためには注解を加えながら、そうした語句などを整理し、パソコンへ入力していかなければならない。その作業には多くの時間と労力を要すると思われ、その作業は私個人では到底なし得ることではない。当研究の予算の多くは、こうした資料の整理及び入力作業に用いる。

## 海外調査出張報告

### タイ貝葉写本調査報告

パリ語文獻研究 研究員 吉元 信行  
 研究補助員 舟橋 智哉  
 研究補助員 清水 洋平

この度、大谷大学真宗総合研究所指定研究「大谷大学所蔵貝葉写本 Paññāsajātaka の校訂・翻訳」の一環として、タイにおける貝葉写本についての現地調査を行った。調査担当者及び調査日程は次の通りである。

- 2004年1月14日～2月14日 バンコク市内 Wat Hong Rattanaram 寺院所蔵貝葉写本事前調査と整理 (担当 研究補助員 清水洋平)
- 2月15日～19日 上記寺院貝葉写本の撮影と Wat Pho 寺院貝葉写本資料の再確認作業 (研究員 吉元信行、研究補助員 舟橋智哉及び清水洋平)
- 2月20日～24日 タイ北部地域 (ナーン、プレー、ランパーン、チェンマイ) における寺院壁画及び貝葉写本調査 (上記三名共同)

#### 1. バンコク市内 Wat Hong Rattanaram 寺院及び Wat Pho 寺院所蔵貝葉写本調査・撮影

まず清水は、2004年1月14日から2月14日にかけて、タイ国バンコク市内の Wat Hong Rattanaram 寺院所蔵の貝葉写本について、フランス極東学院 (EFEO) の Jacqueline Filliozat 女史と共同調査を行った。それは昨年 (2003年) の調査 (2003年3月2日から12日にかけてタイ国バンコク市内の Wat Chetupon <通称 Wat Pho> 寺院所蔵の Paññāsajātaka 貝葉写本タイ王室コレクションの調査・撮影)<sup>(註1)</sup> の折、Wat Pho 寺院の Phra Maha Thiab Malai 長老のご好意により、ご自身の弟子がいる Wat Rachasittharam 寺院が所蔵する膨大な量の貝葉写本についても情報を提供してもらい、急遽、同寺院に案内され、貝葉写本を見せて頂く機会を得た。Filliozat 女史もその時に同行され、その折に「次は、未整理のまま保管されている同寺院の膨大な量の貝葉写本の調査を行いたい」と言われていた。そして Filliozat 女史は2003年10月より同寺院での調査を開始され、我々にも共同で調査をしないかという打診があった。我々は同寺院に Paññāsajātaka の貝葉写本が所蔵されていることは前回訪れた時に把握していたので、Filliozat 女史

の誘いを受け、調査を行うことになったのである。

ところが出発する直前に、突然 Filliozat 女史から計画の変更が告げられた。それは調査対象であった Wat Rachasittharam 寺院から Filliozat 女史の方に同寺院での調査の中止の申し入れがあったとのことである。そこで急遽、Wat Pho 寺院の Phra Maha Thiab Malai 長老と Filliozat 女史の尽力により、既に寺院側の許可も出ており貝葉写本が多く蔵されているとされている Wat Hong Rattanaram 寺院所蔵の貝葉写本の調査に計画を変更することになったのである。

ところがここで一つの問題が生じた。それは、この寺院に所蔵されている貝葉のリスト<sup>(註2)</sup> が既に存在し、Filliozat 女史からそのリストを入手していたのであるが、そのリストの中に Paññāsajātaka 集成の名がなかったのである。ただ、そのリスト中の貝葉写本集成番号246番の中に Tulakapaṇḍita というタイトルのもが含まれており、これが、大谷大学が所蔵している Paññāsajātaka 中の12番 Dulakapaṇḍitajātaka<sup>(註3)</sup> と同一のものではないかと考えた。そこで Paññāsajātaka とされる集成の名は見当たらなくても、Paññāsajātaka 中の一つの物語のタイトルに酷似し、同一と推測されるものがある以上、調査・撮影を行うべきであるという見解に達し、調査に踏み切った次第である。

この Wat Hong Rattanaram 寺院は、アユタヤ期に Hong という名の裕福な中国人によって建立され、かつては Wat Jaosua もしくは Wat Jeasua Hong 寺院として知られ、1767年にトンブリーが首都になった時、中国人の家系をもつタクシン王の庇護のもと、教育の中心地となり、ラーマ3世 (1824～51) の時代に最盛期を迎えた寺院である。

Filliozat 女史と清水は Wat Pho 寺院の Phra Maha Thiab Malai 長老より Wat Hong Rattanaram 寺院の僧院長である Phra Rajavisuddhi Tilaka 長老を紹介して頂き、同長老は寺宝である貝葉写本を私たちが扱うことを快く聞き届けてくれた。更に、必要な貝葉写本を経

蔵から取り出すのに同寺院の長老方の多大な協力を得、また通訳として同寺院の Venerable Phra Theerapattarapop 長老の協力も頂いた。このように同寺院の全面的な協力のもとで Fillozat 女史と清水とが 2004年1月15日より調査を開始したのである。

調査作業は Wat Hong Rattanaram 寺院の一室を借りて、Fillozat 女史が、同寺院の所蔵する貝葉写本のリストの中から調査する貝葉写本集成を複数選び、その中に Tulakapaṇḍita と題する phūk (套) が入っているとされる集成も入れてもらい、それらを経蔵から長老方に持ってきて頂き、作業を始めていくのである。作業は、毎朝8時から正午まで同寺院で行い、正午から17時までは、The Siam Society (註4) に移動し、午前中の調査作業で生じた疑問点などを調べ、また調査結果の整理などを行った。作業は一ヶ月間殆ど毎日行っていた。

調査の結果、貝葉写本集成 No.246の中にタイトルが 'bra tullakapaṇḍitya niṭṭhitam cappariṭṭarapa' と題されている phūk (套) の存在を確認することができ、また貝葉写本の状態も良好であり、文字の判読も可能なものであったので撮影を行うこともできた。これはクメール文字で書かれたパーリ語とタイ語の混成したものであり、1914年に書写されたものであった。今回の調査における当初の目的はこれにより果たせたのである。

ところが今回、Wat Hong Rattanaram 寺院での調査では更なる成果をあげることができた。それは、Fillozat 女史が調査対象として選ばれた複数の貝葉写本集成の中で、まず貝葉写本集成 No.234の中に Ānisaṅsamahākathina と題されるクメール文字のパーリ語で書写されている phūk (套) の中に、その物語の最後の部分が 'narajivajātakaṃ kathinadānānisarṃsaṃ pakāsitaṃ niṭṭhitam | nibbānapaccayo' となっているものを見つけ、これは大谷大学が所蔵している Paññāsajātaka 中の26番 Narajivajātaka (註5) のタイトルとほぼ同一であることから、なんらかの関係があるのか、または Narajivajātaka そのものが書かれている可能性もあったので、これを撮影した(註6)。次に、No.281の貝葉写本集成の中に、偶然、リストには記載されていない複数の phūk (套) の存在を確認した。しかもそれは Paññāsajātaka 中のいくつかの物語とほぼ同じタイトルを記載している phūk (套) を含んでいた。一つは Paññāsajātaka 中、タイ集成書、カンボディア集成書、ラオス集成書では1番目の物語とされ、ビルマ集成書では6番目の物語とされている Samuddhaghosajātaka に同定できる可能性のあるもの

であり、もう一つはタイ集成書、カンボディア集成書では9番目の物語とされ、ラオス集成書、ビルマ集成書では5番目の物語とされている Sumbhamittajātaka に同定できる可能性のあるものであった(註7)。これらは大谷大学が所蔵している Paññāsajātaka の中では欠損している物語であるが、Paññāsajātaka を研究していくには大変貴重な資料となるものである。この No.281の貝葉写本集成は保存状態が極めて悪く、この集成のほとんどの貝葉写本は、雨漏りの水などにさらされていたことによるカビなどの影響により、貝葉の一葉一葉が全て接合しており、一葉一葉を分離させることが難しく、文字の判読もほとんど出来なかった。しかしこの二つの phūk (套) に関しては、どうにか一葉一葉を分離させることができ、また文字の判読も可能であったため、撮影を行うことができたのである。

そしてこの時点から吉元・舟橋も調査に加わり、この集成の中に Sisojātaka と題する phūk (套) の存在も確認した。これは大谷大学が所蔵している Paññāsajātaka 中にあり、タイ集成書では44番目の物語とされている Sisorajātaka に同定できるものではないかと思われたのであるが(註8)、あまりに破損が激しく、ほんの一部のみで全体を撮影することができなかったものもあった。

そしてその後、Wat Pho 寺院において、昨年行った Wat Pho 寺院所蔵 Paññāsajātaka 貝葉写本タイ王室コレクションの調査の折に撮影した貝葉写本資料の再確認作業も行った。その結果、Phra Maha Thiab Malai 長老やその弟子方の全面的な協力により、前回は撮影した貝葉写本資料には欠損や異同が一つもないことが短時間で確認することもできた。

以上のように、当初の目的から考えると、大谷大学が所蔵している Paññāsajātaka 中の Dulakapaṇḍitajātaka の他、Narajivajātaka に同定できる可能性のある貝葉写本、また大谷大学が所蔵している Paññāsajātaka において欠損している物語である Samuddhaghosajātaka、Sumbhamittajātaka などに同定できる可能性のある貝葉写本についても撮影をすることができ、また前回は撮影した貝葉写本資料の一つの誤りもなかったことが確認でき、当初の目的以上の成果をあげることができた調査になった。本稿では調査の報告にとどめ、ここに挙げた資料は今後の研究に役立てたい。

## 2. タイ北部寺院及び所蔵貝葉写本調査

タイ北部の Chiang Mai (チェンマイ)、Lampang (ランパーン)、Phrae (プレー)、Nan (ナーン) 等は、

Lanna (ランナー) と呼ばれる独自の文化圏を形成している。文化的にも距離的にもラオスに近く、昔スコタイの協力のもと成立した Lanna と呼ばれる独立国であった。その Lanna を形成する 9ヶ国の一つが Nan であった。

Nan 県はタイ北部の最も東に位置し、ラオスに隣接する。Nan の中心部からおよそ 30km 東に行くくとラオスとの国境に達する。その Nan の中心部から北へおよそ 30km のところに Wat Nong Bua (ワット・ノンブア) 寺院がある。我々はここを 2004年 2月 21日に訪れた。Nong Bua 村はタイ・ルー族の村であり、織物が有名である。Wat Nong Bua 寺院はランナー様式の建築で本堂 (ポット) が建てられ、四方の壁に壁画が描かれている。Lonely planet のガイドブックによると、ジャータカの物語をモチーフにした壁画であると解説しており、確かに仏像の安置されている方向の壁画はジャータカであろうと推測されるが、向かって左手には Nan の歴史 (戦い等) が描かれており、残りの二面は何を描いたか不明である。

ところで Paññāsajātaka の原初形態に最も近いと考えられるランナー版の貝葉写本に関して、Peter Skilling 氏の報告によると Phrae (プレー) の Wat Sung Men (ワット・スンメン) 寺院に 9 卷 (mat) の完全版が 1834~36年に書写され現存し、その他 Nan と Phrae の 8カ寺に完全版ではないが現存しているとされている<sup>(註9)</sup>。そこでその一つに挙げられている Nan の Wat Phra That Chang Kham (ワット・プラタート・チャンカム) 寺院を次に訪れることにした。ここは昔 Nan で唯一の Tipitaka (三蔵) の図書館があったということなので、ランナー版の Paññāsajātaka 貝葉写本を所有していたとしても不思議ではない。現在では仏像が安置してあって本堂として使われている。建物の大きさは、およそ幅 3m、高さ 7m、奥行 10m ほどである。後に訪れる Phrae の Wat Sung Men 寺院の経蔵と同じくらい大きさである。ここでは残念ながら僧院長が不在のため、貝葉写本を拝見することは叶わなかった。しかし、貝葉写本は全て隣に建てられた境内の学校に運んだという話を教えて頂いた。

次に Wat Phra That Chang Kham 寺院のすぐ近くにある Wat Phumin (ワット・プーミン) 寺院を訪れた。この本堂は 1596年に建てられ 19世紀半ばに改修されており、スコタイ様式の四方仏の座像が安置してある。この四面の壁いっばいに 10 ジャータカの 2 番目の Nimijātaka (538) と Paññāsajātaka の Gaddhanakumārājātaka が描かれており、ランナー文字もところどころに書かれている。これらの絵も本

堂が建てられてから描かれ、19世紀半ばに改修が施されたという。向かって右側に地獄巡りの絵が描かれているため、おそらく Nimijātaka であると推測できる。そうするとおそらく向かって左側が Khattajātaka と思われるが、確定は難しい。

Nan の最後にランナー様式の Wat Phra That Che Haeng (ワット・プラタート・チャーヘン) 寺院を訪れた。ここは Lanna で特徴的な旗供養と巨大な菩提樹が印象的である。旗供養や菩提樹は Paññāsajātaka の 35番 Devarukkhakumārājātaka のモチーフになっている。

次に Phrae (プレー) へと向かった。Phrae の中心部から南西約 15km のところに Wat Sung Men (ワット・スンメン) 寺院がある。ここもランナー様式で建てられている。既に述べたが、Peter Skilling 氏の報告によると、ここにランナー版の Paññāsajātaka 貝葉写本が完全に揃っているという。ここでは幸いなことに僧院長が滞在していたため、話をすることができた。そして清水が Fillozat 女史と 1ヵ月前からバンコクにおいて Paññāsajātaka の共同研究を行っていたこともあり、その機縁で Wat Sung Men 寺院が所有する貝葉目録を拝見することができた。この貝葉目録はチェンマイ大学の研究チームにより作成され、その時、同時にその貝葉写本をマイクロフィルムにしており、それをチェンマイ大学が所有し、今後の研究に役立てるという話であった。そして、その貝葉目録の中から 01-007-00に掲載されている Paññāsajātaka (もちろんタイ文字) を見つけることができた。そして、更なる僧院長のご厚意により、経蔵の中から実物を取り出して下さることとなった。経蔵の 007の経棚 (cabinet) から 10 ジャータカの 10番目の Vessantarājātaka (547) 等は見つかった。しかし、007の経棚全ての貝葉を取り出して調べたにもかかわらず、残念ながら Paññāsajātaka という題名のついた貝葉を見つけないことができなかった。おそらく他の棚に紛れ込んだのだろう。経蔵の中の全ての経棚の中にランナー文字の貝葉が溢れんばかりに数多く所蔵されているため、他の棚から探し出すことは困難であり、その許可も与えて下さらないだろう。しかし Wat Sung Men 寺院に確かにランナー版の Paññāsajātaka 貝葉写本が 9 卷 (mat) あることを確認したことだけでもこの調査をした成果であろう。また、この Wat Sung Men 寺院ではランナー文字が読めるように教育された僧侶が何人かいるという話も聞いた。

Phrae の最後に Wat Luang (ワット・ルアン) 寺院を訪れた。ここもランナー様式で建てられており、

境内にある博物館に多くの貝葉とランナー様式の仏像が展示されていたが、貝葉に書かれていたのはランナー文字であった。

翌2月22日に Lampang (ランパーン) の Wat Phra That Lampang Luang (ワット・プラタート・ランパーン・ルアン) 寺院を訪れた。ここは Lampang 地域に現存する数少ないランナー様式の寺である。大本堂(ウィハーン・ルアン)には19世紀初めに描かれた Vessantarajātaka (547) と思われる壁画が向かって左に、ビルマとの攻防を描いた Lampang の歴史の壁画が向かって右に描かれている。また、その北側に16世紀初めに建てられた、より小さな木造の本堂(ウィハーン・ナムテム)の内部の左右にもわずかに壁画が残っている。そこには向かって左に十数人の人々が認められるため、おそらく説法を聞きたい人々を描いたと思われるが、何の話かは確定できない。また、南門の外に菩提樹と3つの博物館があり、そのうちの1館に貝葉写本がいくつか展示してある。文字の確定は難しいが、おそらくランナー文字が5~6、絵入りのクメール文字が1、モン文字かビルマ文字が1~2あり、中には金メッキされたものや図が描かれたものもある。

次に Wat Phra Kaew Don Tao (ワット・プラケオ・ドントオ) 寺院を訪れた。ここのモンドップ(尖塔がある四方形の仏堂)はビルマ様式であるガラスのモザイクで飾られている。左右と後ろに一場面ずつ、おそらくラーマヤナと思われる絵が金属に彫られている。また本堂の中の左右には比較的最近描かれたと思われる絵が掲げられている。向かって右の10枚は全て Vessantarajātaka であり、左の10枚は10ジャータカが1枚ずつ掲げられている。左から順に、Vessantarajātaka (547)、Temijātaka (538)、Mahājanakajātaka (539)、Sāmajātaka (540)、Nimijātaka (541)、Mahosadhajātaka (546)、Bhūridattajātaka (543)、Candakumārājātaka (542)、Mahānārakassapajātaka (544)、Vidhurapaṇḍitajātaka (545) である。このうち Vessantarajātaka を最後に置くと、タイでは一般的な10ジャータカの順番になる(PTSの Fausbøll 版とは異なる)。また仏像の裏手に貝葉が置かれていたが、表紙だけしか見えず、何文字で書かれているかは確認できなかった。

次に Wat Phra Chedi Sao Lhang (ワット・プラチェディー・サオラン) 寺院を訪れた。この寺は境内に漆喰塗のランナー様式の仏塔(Chedi)が20(Sao)建っていることから名付けられた。ここの本堂の右にある四角い池の上に建てられた小さなお堂の中のガラス

張りの堂に安置してある純金製の仏像(高さ38cm)は15世紀に作られ、頭部に仏陀の頭蓋骨の破片が、胸部に黄金のパーリ貝葉が収められていると伝えられている。もちろん現在、仏像の中を確認することはできない。また本堂には左右に Vessantarajātaka (547) を描いた比較的新しい絵が掲げられている。

翌2月23日に Chiang Mai (チェンマイ) の EFEO センターを訪れた。Fillozat 女史の紹介により、この主任である Louis Gabaude 博士と会う約束を交わしていた。日本やタイの仏教の現状などについて話した後、チェンマイ大学を案内してくれると言う。なぜなら、チェンマイ大学には Wat Sung Men 寺院所蔵のランナー版 Paññāsajātaka のマイクロフィルムがあるからである。この話は Wat Sung Men 寺院の僧院長の話と合致する。おそらく我々が Paññāsajātaka を研究していることを伝えてあるため、配慮してくれたのだろう。チェンマイ大学に到着すると、Gabaude 博士は非常にスムーズに Wat Sung Men 寺院所蔵 Paññāsajātaka のマイクロフィルムのコピーを大谷大学真宗総合研究所宛に送ってくれる手続きをしてくれた。おそらく我々だけではこれほどスムーズに事は運ばないだろう。これは今回の調査の最大の収穫と言ってよい。Wat Sung Men 寺院所蔵の Paññāsajātaka は、ランナー文字で書かれた現存する唯一の完全版であり、ラオス版と並んで Paññāsajātaka の原初形態に最も近いと考えられるからである(ラオス版は現在ドイツの Harold 氏を中心とするグループが研究しているという)。この Wat Sung Men 寺院所蔵 Paññāsajātaka のコピーは、それから一ヶ月後に Gabaude 博士から届けられ、貴重な我々の研究班の蔵書として保有されることになる。ランナー文字の解釈が進めば、今後 Paññāsajātaka の研究が飛躍的に発展するだろう。この後、チェンマイ大学が出版しているチェンマイの石碑の研究報告書や、タイでしか手に入らない本を紹介してもらい購入した。

この後、我々は Wat Chiang Man (ワット・チェンマン) 寺院を訪れた。この寺はチェンマイで最も古く1296年に建てられ、2500年前と1800年前に作製されたと伝承される2体の仏像が安置してある。2500年前と伝えられる1体は大理石の薄肉彫りによるもので、1800年前の1体は水晶で作られ、エメラルド仏と呼ばれる。もちろん仏像の作製年代は伝承の域を越えないが、また、新しい本堂には仏陀の生涯を描いた絵が掲げられている。

次に向った Wat Phra Singh (ワット・ブラシン) 寺院はチェンマイで二番目に古いお寺で、ランナー様

式で作られている。本堂の壁いっぱいにチェンマイ王の生涯を描いてある。

次に Wat Bupparam (ワット・ブッパラム) 寺院に向かった。ここはシャン人またはビルマ人の職人によって作られた絢爛豪華な彫り物によって彩られた本堂と仏塔が印象的である。本堂の内部には四方に彫り物で何かの物語が彫られている。資料室には Kammavāca の貝葉が展示してあった。

次に Wat Chedi Luang (ワット・チェディー・ルアン) 寺院に向かった。このチェディー (仏塔) には、四方の窪みに仏像が安置してある。このチェディーの何百年後の姿がアユタヤの遺跡 [例えば Wat Phra Mahathat (ワット・プラマハータート) 寺院や Wat Phra Si Sanphet (ワット・プラシー・サンペット) 寺院] であろうと想像する。この本堂にはタイ文字の貝葉が展示してあった (タイ文字の貝葉は新しい)。

以上のようにタイ北部の Nan, Phrae, Lampang, Chiang Mai と回ってきて、今回のタイ北部調査の最大の成果は、チェンマイ大学にある Wat Sung Men 寺院所蔵のラーナー版 Paññāsajātaka のマイクロフィルムのコピーが入手できたことである。これは現存する中でラオス版と並んで Paññāsajātaka の原初形態に最も近いと推定されるものである。このラーナー版の解読が進めば、Paññāsajātaka の研究に対する多大なる貢献となろう。現在これを解読中で、Viriyaṇḍitajātaka, Suvanṇarājātaka, Samuddagghosajātaka, Vipularājātaka, Bhaṇḍāgarājātaka の存在を確認したところである。また、Phrae の Wat Sung Men 寺院では残念ながら Paññāsajātaka の実物を見るができなかったが、経蔵の中にある多くのラーナー文字の貝葉の存在を確認できたことは得難い体験であった。そして多くのお寺の壁画や貝葉を目の当たりにして、改めてここは Lanna と呼ばれる独自の文化圏であることを確認した。そこにある仏塔や菩提樹、旗供養は Paññāsajātaka のモチーフとなったものであり、それによって、ここが Paññāsajātaka の故郷であると実感できる調査であった。

最後に、今回の調査を通して我々は、貝葉写本に対するリスト作成の作り方、貝葉の扱い方や年代の見分け方、貝葉写本独特の文字の区切り方や表記のあり方、そして貝葉写本の調査方法など、貝葉に関わる様々なことも Filliozat 女史から教示され、学ばせて頂くことができた。この経験は我々の宝物である。ここに Jacqueline Filliozat 女史、Phra Maha Thiab Malai 長老及び Chiang Mai EFEO Center の Louis Gabaude 博士、そしてこのような機会を与えて下さった大谷大学真宗総

合研究所に甚深の謝意を表したい。

[註]

- 1 詳しくは田辺和子・清水洋平「バンニャーサジャータカ貝葉写本タイ王室コレクション報告」『パリー学仏教文化学』17, 2003参照。
- 2 このリストによると同寺院の貝葉写本コレクションは6つに大きく分けられている。貝葉写本集成番号 No.1-47は Abhidhamma テキスト、No.48-84は Vinaya、No.85-141は Suttanta、No.142-193は Sārasaṅgaha, Apadāna, Sambhāravipāka, Visuddhajanavilāsinī, Saṃyuttanikāya, Sāratthapakāsinī, Sirivijayājātaka, Aṭṭhakathāmahānidessa, Temiyājātaka, Dasajātaka 中のいくつかの jātaka, Vessantaradīpanī, Maṅgaladīpanī, Mahāvamsa, Pathamasambodhi などの様々な作品、No.194-223は文法テキスト類、No.224-283はその他として Kammaṭṭhān, Vipassanā, Trailokavinicchaya, Milindapañhā, Ānisaṃsa, Paritta, Pathamasambodhi, Kassapanibbāna, Aggasāvaka, Mahāvīpāka, Amatarasadhāra, Saddasāra, Kammavāca などに分けられている。
- 3 タイ集成書、ラオス集成書では11番目、カンボディア集成書では12番目、ビルマ集成書では2番目の物語とされている。研究代表者吉元信行『大谷大学所蔵パリー語貝葉写本における Paññāsajātaka の文献的研究 平成10年度～平成12年度科学研究費補助金 (基盤研究(B)(2)) 研究成果報告書』大谷大学文学部, 2001, pp. 80-82 参照。
- 4 タイと近隣諸国の文化・芸術・科学技術を紹介している機関で、出版会社や図書館も併設している。
- 5 タイ集成書では25番目、カンボディア集成書では26番目、ラオス集成書では27番目、ビルマ集成書では12番目の物語とされている。前掲吉元 [2003, pp. 80-82] 参照。
- 6 これに関しては、大谷大学が所蔵している Paññāsajātaka 中の38番 Narajīvakathinadāna-jātaka (タイ集成書では37番目、カンボディア集成書では38番目の物語とされているもの) との関連も指摘できると思われる。
- 7 今回撮影したこれら二つの phūk (套) のタイトルには 'jā taka' の部分は記されていないが、Sumbhamittajātakaに同定できる可能性のある phūk (套) は 'subbhamittasutta niṭṭhitaṃ' とタイトルが記されている。前掲吉元 [2003, pp. 80-82] 参照。
- 8 前掲吉元 [2003, pp. 80-82] 参照。
- 9 前掲吉元 [2003, p. 50] 参照。

# 真宗総合研究所彙報 2003.10.1～2004.3.31

## ■研究所関係

### ◎真宗総合研究所委員会

◇10月7日(火) 18時～(響流館4階会議室)

1. 研究所規程の改訂について
2. その他

◇11月18日(火) 17時50分～(博綜館5階第3会議室)

1. 研究所規程の改訂について
2. 2004(平成16)年度「一般研究」の選考について
3. その他

◇3月19日(金) 17時30分～(博綜館5階第4会議室)

1. 2004(平成16)年度「指定研究」について
2. その他

### ○「指定研究」キャップ連絡会

◇2月23日(月) 14時～

(響流館4階真総研ミーティングルーム)

1. 今年度の研究の進捗状況について
2. その他

### ○「一般研究」研究代表者説明会

◇2月9日(月) 17時～

(響流館4階真総研ミーティングルーム)

1. 研究遂行上の準備と諸注意について
2. その他

## ■指定研究研究会

### 清沢満之研究

#### 《資料調査》

◇10月7日(火) (響流館4階撮影室)

住田智見自筆ノートの調査・撮影

◇10月30日(木) (名古屋市祐誓寺)

住田智見自筆ノートの返却

◇2月13日(金) (響流館4階撮影室)

雑誌『興法』の調査・撮影

### 真宗学事史研究

《『大谷大学百年史 資料編別冊 戦時体験集—「学徒出陣」・「勤労働員」の記録—」の編集・刊行に関する業務》

《編集会議》

◇9月22日(月) 15:00～

(真総研学事史研究 研究スペース)

◇10月6日(月) 17:00～ (同上)

◇11月7日(金) 14:00～ (同上)

◇12月1日(月) 16:00～ (同上)

◇12月15日(月) 16:00～ (同上)

◇12月24日(水) 10:00～ (同上)

◇1月22日(木) 16:00～ (同上)

◇2月10日(火) 17:00～ (同上)

◇2月16日(月) 17:30～ (同上)

◇2月24日(火) 17:30～ (同上)

◇2月25日(水) 15:00～ (同上)

◇3月4日(木) 17:00～ (同上)

◇3月22日(月)

『大谷大学百年史 資料編別冊 戦時体験集—「学徒出陣」・「勤労働員」の記録—』刊行(上製本700部、並製本500部)→関係研究機関、編集協力者等に発送

《他大学における大学史史料室・

大学史研究の現状に関する調査(第2回)》

◇12月3日(水)

(参加者 安富信哉〈真宗学事史研究キャップ〉、織田頭祐〈真宗総合研究所主事〉、東館紹見〈真宗学事史研究研究員〉)

10:00～12:00

○京都大学大学文書館、百周年時計台記念館

〈京都市左京区吉田本町 京都大学図書館、京都大学百周年時計台記念館内〉

13:00～17:00

○同志社大学人文科学研究所 同志社社史資料室

〈京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学今出川キャンパス啓明館内 含 新島遺品庫〉

第1回目(東京方面=本年度前期に実施)と同様、各大学において大学史研究・史料室の歩みと現状・課題について、担当者よりお話しを伺い、関連諸施設を見学した。

《研究会》

◇3月29日(月) 16:30～(真総研ミーティングルーム)

真宗学事史研究 研究成果と課題

各研究員・嘱託研究員・研究補助員が参加して、2年間の研究成果について報告と意見交換を行ない、今後行なうべき諸課題を確認した。

なお、上記のほか、大学史資料原本ならびに写真資料のロッカーへの保管、複写資料のファイル化とデータベース化、外部機関よりの受入資料および購入図書資料の整理等を、日常業務として行なった。

国際真宗学研究

場所：響流館4階 会議室

内容：『An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings』  
曾我量深の三篇の翻訳、安田理深の翻訳について。

＜研究会＞

①2003年10月6日：研究会

『An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings』の出版に向けて対訳の方向性を検討する。及び、日程の確認。マーク・ブラム先生を中心に。

②2003年10月17日

曾我量深対訳研究会。マーク・ブラム先生を中心に。  
16：00～

③2003年10月27日

曾我量深対訳研究会。マーク・ブラム先生を中心に。  
16：00～

④2003年10月28日

曾我量深対訳研究会。マーク・ブラム先生を中心に。  
10：00～ 13：30～ 18：10～

⑤2003年10月29日

曾我量深対訳研究会。マーク・ブラム先生を中心に。  
16：00～

⑥2003年12月11日

安田理深対訳研究会。ポール・ワット先生を中心に。  
16：00～

仏教・他宗教比較研究

《講演》

◇12月10日(木) 18時10分 (真総研ミーティングルーム)

井上尚実 (本学専任講師)

「欧文真宗の諸問題」

《編集会議》

◇1月13日(火) 16時15分 (真総研ミーティングルーム)

「仏教とキリスト教の対話Ⅲ」編集会議

西藏語文獻研究

《研究会》

◇12月2日(火) 16時～

於：響流館マルチメディア演習室

チベット調査旅行報告

「アムドを行く」

伴真一朗 (大学院国際文化学博士課程1年)

「フィールドの可能性」三宅伸一郎 (研究員)

◇3月16日(火) 10時～ 於：響流館演習室1

「オブジェクト指向設計法によるチベット文字自動認識システムについて」

小島正美 (東北工業大学教授)

コンピュータによるチベット語の自動認識について研究・開発の現状を御報告いただき、チベット学研究者が手軽に使えるシステムのあり方や、テキスト・データベース構築への活用に向けての意見交換を行った。

パリー語文獻研究

《研究会・公開講演会等》

◇10月19日(日) 15時30分より研究会

(ホリデイ・イン京都 会議室)

Dr. Peter Skilling (嘱託研究員)

「タイ・東南アジアの仏教貝葉写本」

◇10月20日(月)～24日(金)、27日(月)～29日(水)

(真総研ミーティングルーム)

Dr. Peter Skilling との勉強会：貝葉を transliteration する際の基本的な方法、脚注の作り方等を Skilling 氏から教授いただき、Paññāsajātaka の具体的な解読作業も行った。後半は研究会出席者の各自の研究課題について口頭発表を行い、それについてのディスカッションを行った。

◇10月23日(木) 公開講演会 16時10分より

(マルチメディア演習室)

Dr. Peter Skilling

「Buddhist Manuscripts of Siam and South-East Asia」

講演会後、Skilling 氏を囲んで、懇親会 (学内：ビッグバレー)

◇11月18日(火) 16時10分より研究会 (真総研)

Skilling 氏との勉強会の成果の総括。transliteration する際の取り決め。

◇12月11日(木) 公開講演会 16時10分より

(マルチメディア演習室)

池上要靖 (身延山大学助教授)

「ラオスにおける貝葉写本保存の現状」

◇1月22日(木) 公開講演会 16時10分より

(マルチメディア演習室)

三友健容 (立正大学教授)

「アビダルマディーパ写本の問題点」

◇1月14日(水)～2月24日(火) タイ貝葉調査

・1月14日(水)～2月14日(土)

清水洋平 (研究補助員) による J. Fillozat 女史 (EFEO; フランス極東学院) とのバンコク市内、

Wat Hong Rattanaram 寺院所蔵の貝葉写本調査。

・2月15日(日)～2月24日(火)

吉元信行(研究員)、清水洋平(研究補助員)、舟橋智哉(研究補助員)の三名が、バンコク(上記寺院及び Wat Po 寺院)、ナーン、プレー、ランパーン、チェンマイにおける寺院の貝葉の調査・写真撮影を行った。またチェンマイの EFEO の研究所、およびチェンマイ大学(貝葉資料を扱っている社会学部)を訪問・見学をした。

◇3月23日(火) 13時より(マルチメディア演習室)

「バンコク・北タイ方面調査報告」「研究会三年間の総括」「研究成果の出版・取りまとめについて」

◇3月末:研究成果として、*Paññāsāṅgīya kept in the Otani University Library, Transliteration from Manuscripts in Khmer Script*, Pāli Manuscript Research Project, Shin Buddhist Comprehensive Research Institute, Otani University. を発刊、国内外の主要研究機関に贈呈。

#### 【連絡会議の開催】

◇DB 班第7回連絡会議

10月22日(木) 16:10～17:40

(響流館4階 研究所ミーティングルーム)

- ・第2四半期予算執行状況
- ・大谷大学所蔵蠟管及び蓄音機のメンテナンス終了・達成状況
- ・大谷大学所蔵蠟管の出張カビ取り日程について  
(11月4日～5日を予定)
- ・写真撮影室の整備状況

#### 漢訳文献研究

##### 《研究会》

◇11月5日(水) 17時30分(真総研ミーティングルーム)

- ・後期の研究計画についての打合せ
- ・貞慶『法華開示鈔』の解説研究

◇12月22日(月) 17時(真総研ミーティングルーム)

- ・『法華開示鈔』の解説研究

◇1月16日(金) 17時(真総研ミーティングルーム)

- ・「大谷大学所蔵貴重書の概要」についての報告

◇2月13日(金) 17時(真総研ミーティングルーム)

- ・今年度の活動状況の報告及び今後の活動についての打合せ
- ・『法華開示鈔』の解説研究

◇3月10日(水) 9時～

- ・海住山寺及び笠置寺への研究調査出張

#### 大谷大学 DB 研究

##### 【学内研究会活動】

◇DB 班第14回研究会

12月19日(金) 17:00～19:00

(響流館3階 マルチメディア演習室)

- ・講演「近世大坂から東南アジアへ GIS で探訪する  
——空間情報の視点でみる歴史情報資源——」  
柴山 守(京都大学東南アジア研究センター教授)

研 究 所 報 第 44 号

2004年4月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435